



「ネルソン・マンデラの国： 南アフリカ共和国に赴任して」

さいとう りょう
齋藤 亮

在南アフリカ共和国日本大使館政務・レソト王国担当書記官（情報労連NTT労組コミュニケーションズ本部特別執行委員）

連合出身の外交官として在南アフリカ共和国日本大使館に赴任してから早いもので2年8ヶ月が経過した。改めてこのような貴重な機会を与えて下さった、連合、情報労連NTT労組に御礼申し上げたい。

現在、私は在南ア日本大使館（重家特命全権大使以下25名の外交官、30名の現地職員から成る総勢約60名の中規模公館）の政務班に所属し、当国における政治動向を日々フォローする傍ら、政党関係者、政府高官、情報提供者、労組役員（日本の連合に相当するCOSATU（南ア労働組合会議）は政府の一部）等との接触を通じ、政治情報を収集・分析、それを暗号化された「電報」という形で東京に報告している。

また、南アに周囲を取り囲まれた山岳国「レソト王国（人口約200万人）」の国別担当官も仰せつかっており、着任当初は私のような浅学非才な若輩者に、小国とはいえ一国を任せる度量が外務省にあることに驚かされた。現在では同国への出張も数十回を越え、同国の政府要人等とのネットワークもできつつある。

この仕事の自分なりの印象としては、「一に人間力、二に語学力、三に交渉力」であり、24時間体制の非常にハードな仕事ではあるものの、その分やり甲斐も大きい。日常生活面では、危機管理（南アはブラジルと並び世界一治安が悪い）さえ

しっかりしていれば、気候、自然、食事、レジャー、都市インフラのどれを取っても申し分ないのが南アである。日本大使館が所在する首都プレトリアや南半球最大の商業都市ヨハネスブルグ、世界中の大富豪が別荘を構えることを夢見るケープタウン等の大都市には、日本人が潜在的に抱いているアフリカに対するイメージ「貧しい、汚い、未開発」は微塵も感じられない。整然と区画整理された緑溢れる街並み、プール付きの家々、世界で第3位の長さを誇るフリーウェイなど、まさに南アはアフリカ大陸唯一の開発国であると言って良い。

かつて、日本の人々が「アフリカ」といってイメージしたのは、「ケニア、ナイロビ、サバンナ」であったように感じるが、それが最近はネルソン・マンデラの国「南アフリカ」をイメージする人の数がかかり増えてきているように推察する。南ア人は、日本と南アを「南北の架け橋」になる国だと表現する。南アは欧州と非欧州とが1つの空間に混在する2重構造にあり、日本も、ホモジーニアスな社会ではありながら、明治130余年という時代の中に、欧州と非欧州とが混在しているという意味で、2面性を持っており、欧州、非欧州の2つの世界への関わりを有するという点で南アと共通性があるであろう。

欧州がアジアとの関係を強化したい時、重点



パートナーとして日本を選ぶか、又は中国を選ぶかという現実はあるものの、(経済的な中国の将来性は別にして)経済力では日本がアジアの中では圧倒的であり、欧州的なシステムが通じやすい、話しやすいという意味では日本を選ぶことになる。他方、巨大な人口を有する大国、アジアの源流という文化的意味での存在感では中国である。これはナイジェリア(アフリカ大陸最大の人口数:約1億5千万人)を中国に、南ア(人口約4500万人)を日本に置いてみると、南アと日本との「南北の架け橋」としての共通性が多少とも浮き彫りになってこよう。

他方、南アも数々の問題を抱えている。今回は誌面の都合上詳述は避けることにしたいが、例えば世界最大のHIV/エイズ感染者数(約510万人)を抱えるエイズ問題、貧富の格差の拡大(貧困)等が挙げられる。元来、日本の教科書にも書かれている通り、南アはダイヤモンド、プラチナ、金のほか、近代電子産業を支えるレアメタルの産出量が世界トップであり、天然資源の宝庫である。それが、300年に亘った白人支配・人種差別のため、先住民である黒人は奴隷のように扱われ、人間の尊厳を奪われてきた。白人のみが楽しむレストラン、白人のみが利用できる公衆トイレ、バス、海岸。自分の国でありながら白人の許可なしには街を歩くことすらできなかった黒人は奴隷に近い

待遇で白人のために働かされ、利益はすべて白人のものとなり、それに抵抗することは「死」をも意味した。

国際社会の根強い反アパルトヘイト活動によって、1994年にアパルトヘイトが完全に撤廃されてから11年目を迎えた現在の新生南アは、BEE政策(黒人主体経済の発展政策)やアフリカン・ルネッサンス(アフリカ人によるアフリカの開発)により、アパルトヘイト時代に英国等に亡命し、そこで教育を受けた黒人層が政界・財界の頂点に君臨している。アパルトヘイト時代には想像もつかなかったことであるが、私の住む首都プレトリアにも白人の物乞いが目立つ。しかし、この現象は黒人政権がアパルトヘイト時代の報復として白人の雇用機会を制限している訳ではなく、「彼ら(白人の物乞い)自身の問題である」と政府はコメントしている。ネルソン・マンデラ初代大統領が1993年の新憲法成立後に白人聴衆に対して「私たち(黒人)はあなた方(白人)が必要であり、あなた方に国を離れて欲しくない。白人も私たちと同じ南アフリカ人だし、ここは白人達の国でもあるのだ」とスピーチしたように、現在の南アは数々の問題を抱えながらも黒人、白人、アジア系が融和し、アフリカ大陸唯一の開発国としての成長を続けている。